

【新刊紹介】

ミュージアム・ディレクトリー Vol.1
ユニバーシティ・ミュージアム

DIRECTORY of MUSEUMS Vol.1 University Museums

山本 哲也*
Tetsuya YAMAMOTO

文部省では平成8年度に、学術標本を活用した教育・研究実績、学術標本の保有・整理状況及び地域性等を考慮しながら今後ユニバーシティ・ミュージアムの整備を推進することとした。これは平成8年1月の学術審議会学術資料部会においてまとめられた「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」に基づくものであり、大学等における学術研究活動により収集された、動植物や化石等の学術標本を整理・保存、展示・公開してその情報提供を行うとともに、組織的な研究・教育、さらには「社会に開かれた大学」の窓口として展示などを通じて人々の様々なニーズに答える、ユニバーシティ・ミュージアム設置の提言を受けてのことであった。その一環と言うべきものとして、平成8年度に東京大学総合研究資料館が総合研究博物館に改組されている。その改組の内容は、西野嘉章氏の著書『大学博物館—理念と実践と将来と』（1996年、東京大学出版会発行）によっても窺い知られるところである。

一口にユニバーシティ・ミュージアム、つまり大学博物館と言ってもその規模や内容は様々であるが、現在、日本にどれだけの当該館が存在するかと言うと、博物館的施設とでも言うべきもので展示スペースを持った施設も若干含めた上で、90大学114館が数えられる（『全国博物館総覧』等による筆者の調査）。

諸外国にも大学博物館が多数存在し、貴重なコレクションを有する館もある。その海外の大学博物館のみを対象とし、その情報に関する文献が今ようや

く世に現れたと言える。

今回紹介する標記文献は、アメリカ・イギリス・オーストラリア・カナダ・ニュージーランドの5ヵ国計100館に及ぶ大学博物館の情報を掲載している。巻末にはその他日本を含めて59ヵ国計554館の大学博物館名が記されている。

各館についての内容は、全て展示学研究所がアンケート調査を実施し、そのデータを基に作成されたものである。記載内容は極めて多岐に亘るが、それらの内容を1館につき全てA4判1頁に収め、利用の便を図ろうとする姿勢が窺われる。

内容を列記すると、住所、電話番号、FAX番号、E-mail、Internet URL Address、館種、設立年、年間運営費、建築延床面積、屋内展示面積に始まり、設立経緯・沿革史、大学組織内の所轄、入館料の有無、年間入館者数、総職員数、総職員内の常勤職員数、総職員内の嘱託・非常勤職員数、ボランティア数、総職員内のキュレータ総数、職員内の館専属のキュレータ数、最近の展覧会から、教育普及活動、賛助組織・友の会、利用対象者、全展示点数、全収藏品点数、収藏品データベースの有無、収藏品データベースへのインターネットからのアクセス、収藏品図録の出版の有無、収藏品・常設展示の概要、収藏品内の重要コレクション、出版物の種類、という約30項目が挙げられ、インターネットという世の趨勢に従っての項目も見受けられる。アンケート調査という性格もあって、館により無記載項目の欄も若干ある。

* 國學院大學博物館学研究室

一つ一つ詳細を挙げる訳にはいかないが、その見方は様々であろう。例えば、1683年創立のオックスフォード大学アシュモolean美術・考古学博物館も含まれ、大学博物館の歴史の一端にも触れることができると言ったところであろうか。

本書は5ヵ国についての紹介を行っており、その情報が今後如何に活用されていくかでその価値が問われることにもなる。

この調査実施については、平成9年6月8日の当学会第23回研究大会において、本書の調査編集員の一人でもある木下達彦会員が行った「海外大学博物館（ユニバーシティ・ミュージアム）に関する調査研究」と題する発表でも紹介された。さらに木下氏はこれらのデータを整理分析し、報告を行っていくことを自身述べられている。氏の分析に今後期待するところ大である。

大学博物館と言っても国それぞれで設置基準が異なったりする。例えば韓国では、1950年代半ばの大学設置基準令に大学の博物館設置の義務化が含められ、その後1980年代になって国立大学以外の義務化がなくなっているといった具合であり、日本はと言うと、近年の動向としてはじめに記した通りの内容が挙げられるのである。

大学博物館の研究は単に館それぞれの研究のみで

はなく、そういった設置される基準や背景など様々な視点で推し進められなければならないだろう。そのための基礎資料がこれまでなかったということが逆に不思議に思われる。

因みに西野氏の上記著書では、アメリカが526大学794館、イギリスが51大学126館、フランスが8大学9館所在すると言う。ユニバーシティ・ミュージアムの研究が限りなく広がることを予感させるものである。

100頁を少々越えるボリュームで1万円を越える頒価には、個人的には躊躇せざるを得ないというのが正直なところであるが、こういった博物館に関するまとまった情報を得るには格好の一冊であることは間違いない。情報源としての価値は極めて高いとまず言っておきたい。これがvol. 1であり、次はチルドレン・ミュージアムを扱うとも聞き及んでいる。以後続巻が待たれるシリーズとして紹介する次第である。

発行日	1997年9月20日
発行所	(株)トータルメディア開発研究所
企画・編集	(株)展示学研究所
頒価	12,000円
体裁	A4判、本文116頁